話題　其の４６：“日本人としての危機感：久米的考察”

32 号、33 号と私なりに海外で生活しながら日本の様子を観察してその現状と危機感を書いてきました。
考えるきっかけになったのが右の写真です。
もう 30 年以上も前の私とこの少年が重なるのです。
私のデコボコ人生は、中学卒業と同時に長崎の職業訓練校機械科でヤスリ作業の訓練から始まった気がします。
ヤスリの後はハンマー振り、その後はタガネを左手に持って鉄板の切断でした。右の手のひらにはいくつもの豆が出来てはつぶれ、左手はタガネを打ち外しては強かに親指、人差し指を叩いて腫れをつくりました。
腫れた指はバケツの水で冷やし、再び作業の継続です。自分でもよく耐えたと思います。
20 人程の同級生達も同じように弱音を吐きながらも耐えました。

多くの生産現場では、機械化、省力化が進み、今ではヤスリやタガネと言う硬い金属（合金）で普通の鉄板（軟鋼）を削る、切る手作業は見かけません。従って、職業訓練の現場でも、より現場に即した訓練内容を指導します。例えば、コンピューター制御装置の付いた工作機械の操作やプログラム作成の学習です。そこでは身体に叩き込む従来の指導を軽視してしまいます。

ヤスリなどの手工具で鉄を削る教育訓練に拘ってみましょう。
私の身体には“ヤスリで鉄を削る”という技能が多少身についています。また、ハンマーとタガネを使って鉄板を切断することもできます。そして、タガネやドリルをグラインダーで砥ぐ事も出来ます。
私の身体は「言葉では表しきれない切削のメカニズム」を身に付けているのです。これをカン・コツと呼びます。さて、このカン・コツ技能は今の生産現場では役に立たないのでしょうか？
ヤスリで鉄を削るという訓練を受けて、私は何を習得したのでしょうか？
それは単にヤスリかけという作業動作の習得以上に、根気強くやることでものづくりのセンスを磨き、完成した時の満足感というものを手に入れ、もっと上手にヤスリを使う先生を尊敬しては向上心を養いました。この経験はヤスリかけに留まらず、他の作業にも大きく影響（モチベーション）しました。
これらの経験は、職業人になってもものづくりの姿勢として向上心を持続させ、近代化された生産現場にあっては、身体に蓄積された切削のメカニズムが不具合という問題現象を解決するのです。

ものづくりは重要です。人間が本来持っている能力を伸ばし、創造する力を高め、完成品は消費者の満足という最終目的までも作業者は願いを込めてつくります。
ものづくりの達人（職人）は、人間性も同時に磨かれた存在ではないでしょうか？　何故なら、苦労を知っている人は「自分に厳しく、人に優しい」と思います。「自分を観る目が、人を観る目」だとも思います。結果、ものづくりを通して技の向上と他人への思いやりが育まれていくと思うのです。

世の中はどんどん便利になっていきます。その反面、ものづくりは機械やロボットが担います。
便利な生活は私達がお互いに望んでそうなったものですが、その代価として「ものづくりは人づくりという教育プロセス」を手放したような気がします。
それなら、せめて子ども達への教育だけでも、特に職業訓練の場は、想像性豊かな「ものづくりの観点」を大切にして欲しいと願います。

幸いにも、今年 6 月にスイスで行われた技能オリンピックで日本は「機械組立て」等の種目で 6 個の金メダルはじめ 3 個の銀メダル、4 個の銅メダル、9 職種で敢闘賞を獲得しています。
同大会は、日本デンソー等企業が若手人材育成の一貫として、大きな投資を必要としています。
この通信の読み手の中にも株式会社デンソーで日本の活躍に貢献されている方も居られます。

“武田武士”という唄の一節に「人は石垣、人は城」とあります。
このままで将来の日本を支える人材は育ちますか？　親父世代よ頑張れ。
そして、一生懸命にカン・コツ技能習得にチャレンジするパレスチナ難民の子ども達も頑張れ！
****

執筆及び編集：久米　篤憲